

## 「詐欺師フェーリクス・クルルの告白」の成立

三 枝 圭 作

(昭和62年5月19日受理)

トーマス・マンの「詐欺師フェーリクス・クルルの告白」のなかで、クルルは「長い間、この草稿は鍵をかけた小箱のなかに眠っていた。たっぷり一年間、意欲はふるわず、この企画になんの効果があるかという疑いも湧いて、己は、忠実にあとを追ひ、一枚一枚原稿をかさねながら、告白を続けるということができなかつた」と述懐しているが、「クルル」の成立には1年どころか、実はほぼ40年にわたるたび重なる中断と「挿入」の歴史があった。詩人自身、作品完成の約10年前、つまり1943年の時点で、その事情の一端を次のように説明している。「あのときは『ヴェニスに死す』を書くために『クルル』の稿を中止したわけであったが、あれから三十二年経った今、昔書きやめたところに再び新しい筆をつないでゆくのは、それなりに面白いことかもしれない。そうすると、あれ以来書いた作品や副産物はすべて、三十六歳のときの計画である『クルル』にさしこむ挿入で、そのためには人間一代の期間が必要であったという格好になってくる」<sup>2)</sup> Eberhard Hirscherはこのような断絶を

Mit den „Bekanntnissen des Hochstaplers Felix Krull“ hat Thomas Mann jahrzehntelang ein lustiges Versteckspiel getrieben.<sup>3)</sup>

とユーモラスに表現している。マンの作家生活で、他の作に類を見ない長期にわたるこの断絶のあいだに、その草稿は拡大され、„Fortsetzungen“が公刊され、それらのなかからたびたび朗読も行なわれたのであるが、その結果、「クルル」はマンの生涯で最後の物語作品となってしまった。

一方、エーリヒ・ヘラーが『フェーリクス・クルル』をたのしむには学識など不要である。この作品は、どんなやっかいな素材でもみごとな庖丁さばきによってたくみに料理し、どんな陰うつな意想でもフォームによってきわめて優雅に目的地へとみちびいていくような作品からつねにかもしだされる、あの幸福な、軽がると空をとぶような、単純素朴さの錯覚をうみだす<sup>4)</sup>と述べているように、「クルル」を理解するには「魔の山」、「ヨセフ」あるいは「ファウストゥス博士」などに対するような知識は必要ではないかもしれない。しかし、ヘラーはうえのすぐあとで次のように続けて

いる。「そうはいつでも軽がるととぶようにはこぼれていくものの重みを考慮にしておくほうが、読者のたのしみがいっそう増すであろう」<sup>5)</sup> たしかに、作品は軽く読みとばせるようなものではない。とくに、Kuckuck-Gesprächを頂点とするクルルの「教養体験」は「魔の山」を想起させるものがある。クルルはショーシャ夫人ならぬウブレ夫人にヴィクトル・ユゴの戯曲「エルナニ」の詩句で口説かれるし、「なにしろ『自然発生によって大地より生じた有機的生命体をも含めて、したがって石から人間にいたるまでの文字どおりありとあらゆる存在についての啓発と教示が教養として』彼に与えられるのである」<sup>6)</sup>。このような「ファウスト的」な個所は別としても、この作品の重みを理解するために、その40年にわたる成立史をたどってみることは無意味ではあるまい。

トーマス・マンは1909年の春に「大公殿下」を完成し、その同じ年に詐欺師小説にとりかかる。彼はそのあたりを「略伝」のなかで回顧的に次のように述べている。「『大公殿下』を脱稿したのち、私は『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』を書きはじめていた——この腹案は一風変わったもので、言い当てた人も多かったが、マノレスクの回想録を読んで思いついたものである」<sup>7)</sup> マンはまた、1909年11月2日に「目下私は一つのエッセイを書いているが、これは『精神と芸術』という表題になろう。更に比較的長い物語『詐欺師』と取り組んでいる。これは心理的に先の大公小説のある種の補足を意味するであろう。」<sup>8)</sup>とも語っている。

ところで、トーマス・マンが「クルル」の構想を得たのは1905年、あるいは1906年頃にさかのぼると推定される。そして、ひき続き基本構想は練られたが、「大公殿下」の完成が近づいた1909年3月25日、彼は自分の創作の新しい時期が始まるという意味のことをハインリヒ・マン宛ての手紙で書いている。

Im übrigen halte ich mich so ungefähr und bereite Mehreres vor : einen Essay, . . . , und eine Novelle, die sich ideell an »K(önigliche) H(öheit)« anschließen wird, aber doch eine andere Atmosphäre haben und, glaube ich, sozusagen schon etwas »18 Jahrhundert« enthalten wird. Überhaupt ist mir immer, als begänne nun eine neue »Periode«, wie Schaukal sagen würde.<sup>9)</sup> さらに、翌1910年1月10日付けの同じく兄ハインリヒ宛ての書簡には、「私は詐欺師の告白のために蒐集し、記録し、研究していますが、これは私のもっとも風変わりなものになるでしょう。私にはこんなところがあるのか、と時どき驚かされる始末です」<sup>10)</sup>とある。「クルル」の執筆ははかどり、この年の夏にはその一部が家族の前で朗読されるまでになる。

この章の冒頭の引用でもマン自身が触れているように、彼がこの小説の構想を得るについては、1905年にルーマニアの詐欺師マノレスクの回想録のドイツ語訳を読んだことにある。それは、「Ein Fürst der Diebe. Memorien」及び「Gescheitert. Aus dem Seelenleben eines Verbrechers」という表題のついた2巻本で、ベルリンの出版社ランゲンシャイトが宣伝用として彼に贈ったものであった。

1871年のルーマニア生れで、18歳でパリにやってきたこの男は、世界を股にかけて詐欺の妙技を發揮した。滞在した都市はヨーロッパやアメリカの大都市から、はるか日本の横浜にまでわたる。彼のねらいは主に宝石で、当時の金で3,500万マルクほどの額を盗んだという。彼は最初 Marguis de Manolescuと自称し、続いて Herzog von Otranto、そして Fürst Lahovaryと自称した。しかも、単期間とはいえ、実際に伯爵令嬢と結婚さえした。身の危険は、たびたび精神病の仮病を使ってたくみにくぐり抜ける。彼は、まさに世紀転換期の典型的詐欺師として豪勢に暮したのであった。

このように、「クルル」執筆のきっかけはマノレスクの回想録であったが、ここで、マンが「クルル」に着手するまでの前史をふり返しておく必要がある。1901年には「ブデンプローク家の人々」が出版され、その翌年 dramatische Novelle「フィオレンツァ」が初演される。その他目ぼしい著作を列挙すれば、「小男フリーデマン氏」(1897年)、「道化者」(1897年)、「トリスタン」(1903年)、「トーニオ・クレーゲル」(1903年)、「ヴェルズンゲンの血」(1906年)などがあるが、これらに共通するテーマは Künstlerproblem であり、それは「トーニオ・クレーゲル」において頂点に達する。また、1909年、「クルル」に着手する直前に完成した Fürstenroman「大公殿下」の主人公クラウス・ハインリヒは、題名の示す通り芸術家ではないが、やはりこれら一連の芸術家小説の主人公たちの精神的分身であることはまちがいない。元来「クルル」は、『大公殿下』の対となる作として<sup>11)</sup>考えられていたのであった。やがて、マンは「クルル」に着手する。彼は後年主人公クルルについてこう語っている。「このフェーリクス・クルルは残忍な犯罪者なんかではないがくにもかかわらず英雄」であり、〈深淵のふちに生きる〉人間です。したがって私好みのタイプのヴァリエーションで、内的には深くコンズル・ブデンプロークや〈道に迷った市民〉トーニオ・クレーゲル、『ヴェネツィアに死す』のグスターフ・アッシェンバッハに似ています」<sup>12)</sup>このように、マノレスクの回想録は、マンに従来からの共通のテーマである Künstler-Bürger-Problem の風変わりなヴァリエーションを思いつかせたのであった。それに加えて、回想録の文体もマンの注目をひいた。これらの点に関してマンは「略伝」のなかで次のように述べている。「取扱った問題は、もちろん芸術と芸術家という主題の新しい方向転換、すなわち、非現実的な存在形式の心理学であった。一方文体の点で私を魅了したものは、手本にした回想録が荒削りな形で暗示してくれた自叙伝体の直接法で、これはこのときまで一度も試みたことがなかったのである」<sup>13)</sup>こうして、マンは自分の詐欺師にもマノレスクのように Ich-Form で schriftstellern させていくことになる。<sup>14)</sup>クルルはマノレスクと同様に18歳でパリへやってきて、詐欺師の道を歩み始める。両者とも響きのよい名前を持ち、仮病使いの名人で、いとも簡単に役人をあざむき、いずれも世界旅行におもむく。

ところが、両者の歩みはまるで違っている。クルルはマノレスクの生れ変わりではない。マノレスクは腕の立つ大泥棒であるが、クルルにはパトロンがいくつこからともなく現れるのである。彼はいわば Fortuna の庇護を受けている。宝石類は思いもよらぬ形で彼の手にはいる。貴族の称号ですら、

自ら求めずして他人から提供される。マノレスクが永遠のほら吹きならば、クルルは天成の美貌と美声で前者を凌駕する。回想録に対する「クルル」の決定的な違いをGuido Steinにきいてみよう。Die entscheidende Veränderung liegt aber in der ästhetischen Aufwertung des Hochstaplertums von Felix Krull, der seine betrügerische Scheinexistenz mit dem schönen Schein des Künstlers auf eine Stufe stellt und sich dem künstlerischen „Fach“ zu rechnet.<sup>15)</sup>

そのうえ、マンは「クルル」にイロニーやパロディを付加しているのである。こうみえてくと、単なる回想録書きが書いたマノレスクの回想録には、文学的価値はないとみてよからう。しかし、素材としての価値は十分にあったことがわかる。つまり、Hans Wysling が指摘しているように、回想録はマンの「クルル」への„erste Anregungen“を与えたのであった。

ところで、1909年に「クルル」が書き始められたことはすでに述べた通りであるが、やがて執筆中止の歴史が始まる。トーマス・マンは言っている。「非常にきわどい平衡曲芸ともいうべきクルルの回想記調を長いあいだ続けて押通してゆくことは、もちろん、困難であった。この調子から休息したいという願望が、新しい構想を捉える助けになって、そのため1911年春にはクルルの稿を続けることを中止した。... 妻と私とは五月の一部分をリドで過した。幾つかの奇妙な事情や印象と、新しい事物をひそかに見張っている態度とが共働した結果、創作のアイディアが起って来ずにはいなかったが、このアイディアがやがて『ヴェニスに死す』という名で具体化されたのである。この短篇は、他の企てと同様、ごく控え目な意図のものであった。詐欺師小説の仕事に割りこまず、一気呵成の即興詩で、素材からいっても分量からいっても、ほぼ『ジンプリツィシムス』誌に適当な物語くらいに考えていたのだ」<sup>16)</sup>

「ヴェニスに死す」の執筆はこの年の7月初めに始まった。1912年、このアッシェンバッハの物語の完成後、2、3ヶ月間ではあったが、マンは「クルル」の仕事に帰ることもあった。<sup>17)</sup> 同年マンは「クルル」の第1巻第5章、つまりMusterungsszeneを「ある長篇の断片」という形で発表している。しかし、ここにまた中断がはいる。

「1912年の五月から六月にかけて、私は臨時入院者という格で、三週間グヴォスの妻のそばで暮しながら、あの不思議な環境の印象を集めた... それらの印象から、ヘルゼル山地を背景とする簡潔な短篇の観念が出来上った。この短篇も、何とかして稿を続けたいという誘惑を感じていた詐欺師の告白の仕事の間に、手早く挿入しようというつもりであった」<sup>18)</sup> 以上はマンが「魔の山」成立の由来を述べたものだが、彼はこの計画を1913年7月24日にエルンスト・ベルトラムに宛てて次のように書き送っている。「三週間南の海岸に行っていたお蔭で、また元気を回復しました。にもかかわらず、例の奇妙な長篇小説はいぜん棚上げしたまま、差当りもう一つ短篇を準備しています。これは『ヴェニスに死す』の対をなすユーモラスな作品になりそうです」<sup>19)</sup> こうして、その頃書き始

められたこの「やや長めの短篇小説」のために、「クルル」の執筆は中断された。ところが、この„Zauberberg“-Novelleは千ページを起すRomanにふくれあがり、「手早い挿入」のはずが、何と12年間にもわたってしまうのである。

1924年には、ようやく「魔の山」が完成するのだが、マンは相変わらず「クルル」を中断したままである。1925年4月12日、彼はMax Rychnerに宛てて書いている。

Besonderen Eindruck hat mir gemacht, zu sehen, welche Wichtigkeit Sie dem „Felix Krull“ unter meinem Versuchen beimessen. Wahrhaftig, ich sollte das Ding fertig zu machen suchen ; es spricht mir selbst, immer wenn ich innerlich daran rühre, noch mancherlei Sonderbares Amüsantes. Aber immer wieder schiebt neues, anderes sich davor, was „erst noch rasch“ gemacht sein möchte, —z. Z. sind es historisierende, kostümliche Dinge, Joseph in Ägypten, Spanisch-Niederländisches, Erasmus-Luther. . .<sup>20)</sup>

周知のように、このJoseph-Stoffは長篇3部作にふくれあがり、「クルル」は1926年のこの「ヨセフ」小説の執筆開始によって、またもや中断されてしまう。しかし、マンは「ヨセフ」を書きながら「クルル」のことを忘れてしまったわけではない。1928年2月4日には次のような記録がある。「クルル、彼のおもしろい運命の物語は残念ながら、外的事情のために未完のまま残っている（この物語は断片しか出版されていない）。今やこのヨセフが別の仕方、別の意味で古い計画を遂行するのだろうか？

『いや、クルルは著者の想像力の中に深く眠ったまま、生き続けていますよ。ある日彼は再び目をさますでしょう』<sup>21)</sup> さらに同年10月28日には、マンは次のように言っている。「私の詐欺師小説の継続と完成も放棄したわけではありませんよ。でも今は、つまりこの冬は外からの多くの要求を満たすために仕事を中断せねばなりません」<sup>22)</sup>

ところが、そのうちにマンは執筆中のこの聖書小説に「ワイマルのロッテ」をはさみ入りたいという計画を抱くようになり<sup>23)</sup>「クルル」はまたまた休息してしまう。マンは1942年まで「ロッテ」にかかわっていたが、さらに別の事態が発生する。今度は「ファウストゥス博士」が割り込んできたのである。それにはカーチャ・マンのすすめもあった。「かれはこの四部作<sup>24)</sup>を完成したあと、...またなにかすこし大きなものを書く気になりました。かれは『クルル』を書きつぐか、それとも没落への道を歩みつづけ、ついに国家社会主義という奈落にまでおちこんでしまった時代の全過程を包みこむならかの作品を書くか、どちらにしたものか迷っていました。『クルル』は、そのパロディーふうの調子を最後までたもちつづけるのはむずかしいという判断から、中断されたまま放置されていたのです。わたしは、今回も『クルル』をまずとりあげるのはやめて、『ファウストゥス』を書くようにと、しきりに勧めました。〈そうでしょう〉とわたしは言いました。〈『ヨセフ』は、もちろん時代とさまざまな関係をもっていることは間違いありませんけど、それでも、言ってみれば、すこ

し逃避的な感じがしないでもありません。もし、続けていままた『クルル』をとりあげるとなると、逃避的傾向がいちだんと強まるのではないかしら。わたしは、『ファウストゥス』計画をおすすめになった方がいいと思いますわ)

結局、かれもそうしました」<sup>25)</sup>

1943年10月7日付けの手紙でマンは Dieter Cunz に宛てて書いている。

Felix Krulls Hochstapelei ist ein wenig »zurückgeblieben«, da sie durch Joseph ins Mythische hinausgewachsen ist. Trotzdem kann ich Ihnen sagen, daß ich nach Abschluß des »Ernährers« an dem Punkte war, den Krull wieder aufzunehmen. Schließlich hat dann doch eine 40 Jahre alte Notiz, die den Kern eines Musiker-Romans bildet, den Sieg davongetragen—für diesmal.<sup>26)</sup>

こうして、1947年に「ファウストゥス博士」が完成するや、その年に「クルル」はたしかに浮上する。「このところたいしたことはしていません。頭の中であれこれとやってみながら（昔の『フェーリクス・クルル』の断片を書き足して、老後の楽しみに、本格的な悪漢小説に仕立てるといえるのはどうでしょうか?」<sup>27)</sup>とトーマス・マンは11月25日付けの手紙でヘルマン・ヘッセ宛てに書いている。しかし、この度も「クルル」は沈んでしまう。「クルル」は「選ばれし人」に道をゆずったのである。ちなみに、「選ばれし人」は1948年1月に執筆が開始され、完成は1950年10月26日、刊行は翌年3月であった。ここで「クルル」中断の歴史にひと息いれよう。

1910年11月、トーマス・マンはワイマルへ講演旅行に出かけ、かつての学友 Vizthum von Eckstädt 伯爵の客となって感動的な歓待を受け、「クルル」から初めて公の朗読を行なう。翌1911年1月にはルール地域及びヴェストファーレンへの講演旅行で、「クルル」やいくつかの短篇小説から朗読している<sup>28)</sup>以来、「クルル」はしばしば朗読される。そして「クルル」の中断中にもそれは行なわれた。以下目ぼしいものをひろってみよう。1914年にマンは招かれてスイスに旅し、チューリヒ、ルツェルン、ザンクト・ガレンで、「生みの悩み」、「神童」、「大公殿下」及び「クルル」から朗読しているし、1916年10月23日にはプレスラウで、11月5日にはベルリンで「クルル」から朗読している<sup>29)</sup>翌1917年にはハンブルクへ行き、「神童」、「生みの悩み」、「大公殿下」、「クルル」から朗読した<sup>30)</sup>さらに1929年、マンはノーベル賞授賞式に出席のため12月7日にミュンヘンを発った。途中ベルリンに立ち寄り、国際学生協会のレセプションで「クルル」から朗読している。同月9日にはストックホルムに着き、11日はハード・スケジュールのなかに終えたが、翌12日にドイツ・スウェーデン協会のために「クルル」、「トーニオ・クレーゲル」、「神童」から朗読した<sup>31)</sup> 1950年代になると、トーマス・マンはすでに75歳を越えているにもかかわらず、相変わらず数多くの朗読を行ない、その多くは「クルル」からなされている。例えば、1955年5月、リューベック市庁舎での名誉市民証授与式に列した後、彼は市立劇場で「トーニオ・クレーゲル」、「若きヨセフ」、「クルル」からそれぞれ朗読

し、同年6月6日の80歳の誕生日の前日の晩には盛大な祝賀会が開催され、マンはその席で「クルル」から朗読を行なう<sup>32)</sup>といった具合である。これらの事実は、マンの数々の朗読が反響を呼んでいることを物語るものであり、彼自身の未完のままになっている「クルル」への関心のおとろえていないことを示していると思われる。

以上みてきたように、トーマス・マンの「クルル」は幾多の朗読会によって知られていたのであるが、一方では、個々の章のVorabdruckeによってもその名は公になっていた。早くも1911年には、„Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Frull. Bruchstück aus einem Roman. Der Theaterbuch“という題目で、Müller-Resé-KapitelがS. Fischer Verlagの„Almanach“に現れた。そして1919年、ハノーファーのKestner-GesellschaftのSammelband „Das Kestnerbuch“のなかで、„Schulkrankheit“なる表題のもとに、第1巻の第6章が出ている。さらに、1925年6月初めには、ウィーンの„Neue Freien Presse“において「クルル」のMusterungsszeneからの試作が活字になった。ずっととぶが、マンは1951年以来„Neue Rundschau“誌にいくつかの未発表の断片をのせている。

他方、「クルル」は上述のVorabdruckeによつてのみならず、断片としてながら、やがて正式に出版されることにもなる。即ち、1922年ウィーン、ライプツィヒ及びミュンヘンのRikola Verlagから「詐欺師フェーリクス・クルルの告白——幼年時代の巻」が「計画全体の断片<sup>33)</sup>」として公刊されている。それはクルルの父の破産とその自殺にいたるまでの部分を含んでいた。この„Krull“-Fragmentは、翌1923年に単行本として、シュトゥットガルトのDie deutsche Verlagsanstaltから発行され、1932年には、Insel-BüchereiのNr. 312としてライプツィヒのInsel Verlagから刊行された。それ故、「幼年時代の巻」は独立の作品であったときえいえよう。1937年には、アムステルダム出版社Querdio Verlagで先の「幼年時代の巻」をさらに拡大した版が出版される。この版は第2巻の最初の5章、つまりMusterungsszeneまでを含んでいた。結局未完に終わったのであるが、1954年に「クルル」が、「回想録第1部」として最終的に出版されるまでの刊行事情は以上の如くである。

1951年9月、トーマス・マンはチューリヒ近郊のKloten空港よりアメリカ合州国へ帰国の途についた。彼はニューヨークには1日滞在するが、シカゴにいる末娘Elisabeth Mann-Borgeseのもとに3日間留まった際、同地の„Museum of National History“を訪れる。この経験は、さっそく「クルル」のKuckuck-Gesprächに応用されることになった。

Chicago hat ein hervorragendes Museum oal onalual history, das wir nicht nur einmal, sondern auf meinen Wunsch noch ein zweites Mal besuchten. Es sind da die Anfänge des organischen Lebens—im Meere, als die Erde noch wüst und leer war—, die ganze Tierwelt, Aussehen und Leben des Frühmenschen (auf Grund der Skelettfunde plastisch rekonstruiert)

höchst anschaulich dargestellt. Die Gruppe der Neandertaler (mit deren Typ eine Entwicklungslinie abbricht) in ihrer Höhle vergesse ich nie und nicht die hingebungsvoll hockenden Ur-Künstler, die die Felswände, wahrscheinlich zu magischen Zwecken, mit Tierbildern in Pflanzenfarben bemalen. Ich war völlig fasziniert, und eine eigentümliche Sympathie ist es, die einen bei diesen Gesichtern erwärmt und bezaubert.<sup>34)</sup>

マンの体験利用については、K. シュレーターが興味深いことを書いている。「ヴェノスタ候爵になりすましたクルルに『いつかきつと叶えられる』はずの教皇への謁見の場面も、もし、この小説が第二部まで完成されていたら、まちがいなく描かれていたにちがいない。そのさいには、トーマス・マン自身の体験が——1953年に、青春の一時期をおくったローマを再び訪れたとき妻とともに教皇ピウス十二世に個人的謁見を許されたさいの体験が——利用されたであろうことは疑う余地がない。未完に終わった作品のなかでは、『そのときには、なんとひざまづいて<聖なるお方さま (Votre Sainteté)>と言わなければならないのだそうだが、それもまた大いに楽しいことだろう』と予示的に記されているにすぎないが」<sup>35)</sup> これらの引用に関連して、ここでカーチャ・マンの言うところもきいておかなければならない。体験を自作に利用するに際しての、妻から見たマンの一面が述べられているからである。「かれは、あとで小説に利用するために、ひとを仔細に観察しておくなどということはありませんでした。あるときだれかに会い、その人のことが記憶の片隅にのこる。小説を書いているうちに、たまたまその人がびつりの登場人物がでてくる。そこで、記憶の片隅にねむっていた人の出番となる、というわけです。決して、はじめから意図していたわけではありません。そんなことは話のほかです。老クルル一家の場合にも、同じようなことがありました。そのモデルについて訊ねられたとき、トーマス・マンはこう答えたものです。『そうですねえ、ライン河の船のうえで半時間ほど眺めていたことのある人たちですよ』

基本的にこういう具合でした。かれは、いちど心にとめた人間なら、どんな人間でも描きだすことができたのではないのでしょうか」<sup>36)</sup>

以上では、いずれもマンガ創作に自己の体験を引き出してくることが述べられているが、このような面とは別に、彼は一方では、早くから小説のために各種の資料を集め、体系的に仕事をするという規立正しい作家でもあった。

Ich sammle, notiere und studiere für die Bekenntnisse des Hochstaplers, die wohl mein Sonderbarstes werden.<sup>37)</sup>

と1910年1月10日付けの手紙で兄ハインリヒに伝えているように、彼は創作に関連の文献、新聞、雑誌、画報などを集め、それらのなかから切り抜き、抜き書きをし、メモをとった。いずれも一定の観点に従って秩序づけられ、整理される。この頃に収集された資料は晩年まで保存されていて、1951年に「クルル」の仕事が再開された際にも利用されるのであるが、これらの資料の束には、そ



れぞれ次のような表題がつけられていたという。

„Kur-und Lustorte“, „Interieurs“, „Elegante Festlichkeiten“, „Weiblichkeit“, „Sport“, „Hôtel. Reise. (Dandy Gartenarbeit) Heimat. Zuchthausaufseher“, „Reisen“, „Coups Carlsson“, „Gefangenschaft“, „Allgemeines“.<sup>38)</sup>

ところで、マンガ対象を描く際の、その詳細にして正確な記述は広く人の知るところであるが、そのために「クルル」の場合にも、集められた多くのこれらの資料のなかで、各種の絵が重要な役割を果たしていた。それらの絵は、絵はがき、広告、新聞、グラフ雑誌、旅行案内書などのものであり、大部分は特に芸術的に価値が高いといったものではない。この点では「マノレスクの回想録」が単なる素材の域を出なかったのと同様で、要するにフィクション化のための手がかりとして使われたのであった。

いくつかの実例をみてみよう。税関で、パリのセント・ジェームズ・アンド・アルバニイ・ホテルに到着の際に、あるいはディナーにおもむくときに、その都度ちがった衣装で登場するウプレ夫人は、1910年から1913年にかけて、ベルリンのグラフ雑誌 „Die Woche“ にのっていたそれぞれ別々の写真や絵にもとづいて描き出されている<sup>39)</sup> クックック教授夫人のためにはロシアの踊り子 Anna Pawlowa (1882-1931) やイタリアの女優 Anna Magnani などの写真が利用された<sup>40)</sup> Wilhelm Gwinner の Schopenhauer-Monographie の Titelpor­trät に使われたショーペンハウエルの肖像画は、クックック教授の描写に役立った<sup>41)</sup> また、マンは『『アムバッサドールのグランド・ホテルの庭園風にしつらえられた屋上テラス』での晚餐の場面の描写には、古い雑誌から切り抜いてあった『夏の炎暑にうだる世界都市のなかのオアシス』と題された詳細に描かれた絵を細部にいたるまで利している。その絵には、ヴァンドーム公爵夫妻やギリシアのゲオルク王子夫妻、あるいはガブリエレ・ダヌンチオなど、かつてのヨーロッパの上流人士たちが集っているさまが描かれているが、小説のなかでは、彼らは無名の端役にされていて、ただ貴婦人たちの『流行のつばが広く、大胆に反った帽子のファッション』だけが、すぎ去った時代の幼想的な付属品として印象的に描かれているにすぎない<sup>42)</sup> 彼は利用した絵の利用すべきところは利用し、不要の部分は省略ないし簡略化するのである。

さて、ここで再びマンの「クルル」執筆に話をもどそう。1951年、これまでの長い「クルル」中絶の歴史が終り、ようやく「クルル」完成のための第2段階の仕事の時期が始まる。まず、マンの Erich von Kahler 宛ての同年2月1日の手紙をみてみよう。

Da aber der »Erwählte« abgetan und in Druck ist, habe ich den uralten »Felix Krull« wieder vorgenommen und setzte ihn, ins Unbekannte schlendernd, fort, ohne rechten Glauben, daß ich je noch damit fertig werden werde. . . . Ich habe tatsächlich auf demselben Münchener Manuskript-Blatt (von Prantl, Odeonsplatz), auf dem ich damals nicht weiter kam, zu schreiben

fortgefahren.<sup>43)</sup>

さらに、12月23日にはPaul Amann宛てに書いている。

Ich habe allerlei Weiteres an den Krull-Memoiren geschrieben, laufe aber immer Gefahr ins  
 »Faustische« zu geraten und die Form zu verlieren.<sup>44)</sup>

このようにして、マンは四十数年前に放り出したままにしていた「クルル」をその仕上げに向って書き継ぐことにしたのである。そして、1954年9月末、ついに「詐欺師フェーリクス・クルルの告白——回想録第1部」の出版にこぎつける。脱稿したのは半年ほど早く、同年2月のことであったが、その量は1913年までに書きためていた部分の3倍にふくれあがった。この期に書かれた物語は、クルルのパリへの旅立ちに始まり、世界旅行の最初の目的地リスボンでの滞在で終わっている。この部分とそれ以前に書きためていた部分の間には、ほぼ40年の執筆休止があったのであるが、そのつなぎ目はまるで識別できないほどに成功した。「かれは四十年間も放置しておいたあとで、1951年にふたたび『クルル』を書きつぎはじめたとき、完全にむかしと同じ調子をたもつことに成功しました。基本的には縫い目すらまるでわからないくらいです<sup>45)</sup>とカーチャ夫人は述べている。

しかし、以上のような「クルル」出版にいたるまでの最終段階においても、例によって、執筆の道は平坦ではなかった。はじめのうち、仕事は進歩し、1951年11月20日に、「クルル」の「旅立ちと到着」及び「サーカス」の章が断片として„Die Neue Rundschau“誌に掲載されるに至ったが、まともや道がとぎされてしまった。その期間は、1952年5月からほぼ1年にわたっている。また短篇がはいってきたのだ。その年の11月、「クルル」はいつ出るのかという問に対してマンは答えている。「おそらく二年のうちね。でも分かりませんよ。目下私は『欺かれた女』と題する、小さい写実的な物語を書いています<sup>46)</sup>また、翌年、つまり1953年4月に「クルル」はどうなっているのかとたずねられて、彼は、「さあ、『クルル』は目下休止です。その代り私は、五月にミュンヘンのメルクル誌に出る予定の短篇を書いているところです。ほぼ『ヴェネツィアに死す』の分量の短篇です<sup>47)</sup>と応じている。この短篇とは、いうまでもなく「欺かれた女」のことにほかならない。

以上、数々の執筆中断の状況を眺めてきたが、このように作品の執筆がひとまず中断されるということは、作者にとって、ともかく仕事を継続する意志はあるということを示すものであろう。しかしその反面、このことは、作者のこの仕事に対する疑問も頭をもたげてきたということではなかろうか。マンには、長い中断のあいだに時として「クルル」を書き続ける気がすすまなくなるふしがかがわれる。以下そのあたりの事情を検討してみよう。

1951年、ほぼ40年後に「クルル」の第2期の仕事を始めた頃、マンはHermann Kesten宛ての未公開の手紙のなかで次のように述べている。

Die Vollendung steht in weiter Ferne. Es ist mir oft zweifelhaft, ob ich noch die Laune aufbringen werde, das Buch durchzuführen.<sup>48)</sup>

また、「私がこの長篇を書き始めたのはすでに四十年以上も前のことで、そのあと他の仕事のために中断しましたが、時間と力さえ許せばいつかは完成したいと思って最近またとりあげたわけです。完成がいつになるかは言うことはできませんが、一、二年は続くかも知れず、それはいろいろの事情次第ですね」<sup>49)</sup>との言もある。

さらに、1954年2月、「回想録第1部」の脱稿後マンは言う。

Das ist nun ein Band von vierhundertvierzig und einigen Seiten, »Der Memorien Erster Teil«, der im September erscheinen soll—Fragment immer noch, aber Fragment wird das wunderliche Buch wohl bleiben, auch wenn mir Zeit und Laune gegeben sein sollten, es noch um vierhundertvierzig Seiten weiterzuführen . . . Das ist wohl das Charakteristischste, was ich darüber sagen kann : Daß es wohl einmal abbrechen und aufhören, aber nie fertig werden wird.<sup>50)</sup>

うへの三つの引用において、マンはいずれも「クルル」の未完成を予感しているのである。ここで、最後にもう少し引用してみよう。彼は、1952年4月18日付けFerdinant Lion宛ての手紙に書いている。

「私なぞ、本当は、いまさらフェーリクス・クルルの回想録のようなものを背負い込むべきではなかったのです。題材から言っても所要エネルギーから言っても、あらゆる点で、私の年齢むきのde mon âgeものではありません。汎性愛主義だの宝石泥棒だの——残り少ない人生の何年かをこんな冗談ごとに費していいもののでしょうか？ しかもこの冗談ごとは、難しくて、馬鹿馬鹿しいときています。最近書いた中にとっても面白い部分があるのは事実ですが、それでも私は、途中で打切ろう、断片にしては彫大だけれどもそこいらで止めて置こう、そして、例えば、あなたも勧めて下さっているエラスムスを扱った短篇のような、私の気持をもう少し引立ててくれそうな新しい作品にかかれるようにしよう、と思うことがよくあります」<sup>51)</sup>これにすぐ続けてマンは、「しかし、他面私は、『そこいらで止めておく』習慣のまったくない男です。… 元来私は、自分の能力の限界内では、物事を最後までやりぬく気性の人間です」<sup>52)</sup>と書きながら、「ただし、根本的に言って、私の使命は『ファウストゥス博士』までで終ったらしく、『選ばれし人』がすでに冗談めいた後奏曲だったので、いま書いているものに至っては、もはや暇つぶしに過ぎません」<sup>53)</sup>と要件を結んでいる。

前述のように、「回想録第1部」が出版されたのは1954年のことであり、作者マンは翌年の1955年に生涯を閉じているので、この小説は永遠に未完となったが、たとえここで作者の死がなかったとしても、以上のことから筆者には、彼は、もともとその完結を信じてはいなかったし、また、完結させるつもりはなかったと思われる。表題の、未完を意味する「回想録第1部」という言葉は、この意味で極めて象徴的である。

## 注

- 1) トーマス・マン全集 VII 新潮社 1972年 p.284
- 2) トーマス・マン全集 VI p.538
- 3) Eberhard Hirscher : Thomas Mann. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin. 1973, S. 190
- 4) トーマス・マン反語的ドイツ人 エーリヒ・ヘラー／前田敬作・山口知三訳 筑摩書房 1975年 p.437
- 5) 同上
- 6) トーマス・マン K・シュレーター／山口知三訳 理想社 1981年 p.203/204
- 7) トーマス・マン全集 X p.330
- 8) トーマス・マンは語る V・ハンセン, G・ハイネ編／岡元藤則訳 王川大学出版部 1985年 p.23
- 9) Thomas Mann/Heinrich Mann Briefwechsel 1900-1949. S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1984, S. 95
- 10) トーマス・マン全集 VII p.566
- 11) トーマス・マンは語る p.341
- 12) 同上, p.44/45
- 13) トーマス・マン全集 X p.330
- 14) Eberhard Hirscher : Thomas Mann. S. 192
- 15) Guido Stein : Thomas Mann Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull : Künstler u. Komödiant. Schöningh, Paderborn. München. Wien. Zürich. 1984, S. 12
- 16) トーマス・マン全集 X p.331
- 17) Eberhard Hirscher : Thomas Mann. S. 191
- 18) トーマス・マン全集 X p.332/333
- 19) トーマス・マン全集 XIII p.109
- 20) Guido Stein : Thomas Mann Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull. S. 14
- 21) トーマス・マンは語る p.123
- 22) 同上, p.131
- 23) Thomas Mann : Briefe 1989-1936. S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1962, S. 424
- 24) 「ヨセフ」4部作のこと。
- 25) カーチャ・マン 夫トーマス・マンの思い出 山口知三訳 筑摩書房 1975年 p.121
- 26) Thomas Mann : Briefe 1937-1947. S. 336
- 27) ヘッセン＝マン往復書簡集 井手貴夫・青柳謙二訳 筑摩書房 1972年 p.171
- 28) Hans Bürger, Hans-Otto Mayer, Thomas Mann. Eine Chronik, Frankfurt a. M. 1965, S. 33
- 29) 評伝トーマス・マン 菊盛英夫 筑摩書房 1977年 p.262, 308
- 30) 同上, p.311
- 31) 同上, p.354
- 32) 同上, p.515
- 33) トーマス・マン全集 X p.331
- 34) Hans Bürger, Hans-Otto Mayer, Thomas Mann. Eine Chronik. 1965, S. 231

- 35) トーマス・マン K・シュレーター／山口知三訳 p.204／205
- 36) カーチャ・マン 夫トーマス・マンの思い出 p.113
- 37) Thomas Mann／Heinrich Mann Briefwechsel 1900-1949. S. 104
- 38) Guido Stein : Thomas Mann Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull. S. 16
- 39) Hans Wysling (Hg.)—unter Mitarbeit von Yvonne Schmidlin— Bild und Text bei Thomas Mann —  
Eine Dokumentation, Bern 1975. S. 84ff.
- 40) Ebenda, S. 124f.
- 41) Ebenda, S. 110f.
- 42) トーマス・マン K・シュレーター／山口知三訳 p.204
- 43) Thomas Mann : Briefe 1948-1955. S. 188
- 44) Ebenda, S. 237
- 45) カーチャ・マン 夫トーマス・マンの思い出 p.121／122
- 46) トーマス・マンは語る p.341
- 47) 同上, p.348
- 48) Hans Bürgin, Hans-Otto Mayer, Thomas Mann. Eine Chronik, S. 231
- 49) トーマス・マンは語る p.335
- 50) Hans Bürgin, Hans-Otto Mayer, Thomas Mann. Eine Chronik, S. 244
- 51) トーマス・マン全集 Ⅷ p.543／544
- 52) 同上, p.544
- 53) 同上

